

2024 (令和6年) 平山郁夫画伯作品集 「回想のシルクロード」 作品紹介

表紙「だいびばしゃ こくとうげんきょう大毗波沙国桃源境」の舞台は、パキスタン・イスラム共和国の北西部にあるフンザ渓谷である。かつてここは、小さいながらもフンザ王国としての独立国だった。世界第2の高峰K2を主峰とするカラコルム山脈の西に位置するこの地は、春には杏、林檎、桃といった果樹の花々が一斉に咲く。清浄な空気とあいまって、平和で心豊かな不老長寿の地として知られていた。画伯が訪れてから40年余の時が立つ。安らぎと平和の理想の地は今…。

1・2月「**楼蘭の遺跡・昼**」は、1989年に平山画伯が朝日新聞社主催の楼蘭学術調査団の団長として3日間、楼蘭遺跡に滞在した時の成果の一つと言えよう。明るい陽光のもと画面中央にそそり立つ仏塔の姿は、憧憬の地にたどり着けた喜びと目的を達成した画伯の満足感が率直に描き込まれているようだ。この作品は同遺跡の「夜」と対を成している。楼蘭をテーマとした画伯の作品の最高作であろう。

3・4月「**羊群帰牧図**」は、画伯が東京藝術大学の中世オリエント遺跡学術調査団の一員として、トルコのアナトリア高原中央にある洞窟修道院の壁画調査にあたっていた時の体験から描いた作品である。粗末な宿舎の前を毎朝、羊や牛が大きな鳴き声をあげて通る。他人との接触が少ない地では、家畜の群れも画伯にとっては仲間のように思えたとのこと。

5・6月「**絲綢の路 パミール高原を行く**」は、画伯が薬師寺に奉納した玄奘三蔵の求法の旅を描いた「大唐西域壁画」完成後の最初の大作。パミール高原は、シルクロード最大の難所である。画伯は最後の一筆を入れると直ちに、東洋のノーベル平和賞と言われるラモン・マグサイサイ賞の授賞式に出席するため、フィリピンのマニラへと旅立って行った。

7・8月「**月域月彩 (パルミラの遺跡)**」は、平山ブルーの世界である。描かれているのは記念門。パルミラは東洋と地中海世界をつなぐ交易の要衝として栄えたが、272年、時のローマ皇帝アウレリアヌスによって滅ぼされた。最後の統治者は美貌をうたわれた女王ゼノビアだった。画題の月域は西の果て、月彩は月の光の意。

9・10月「**北京の秋**」に描かれている北京は中国の首都。げん みん しん元、明、清の600年にわたる帝都でもあった。北京は当初、モンゴル族が1271年に元を建て、大都として築かれた。元を滅ぼした漢民族の明は三代永楽帝の時、1421年に北京として遷都。満州民族の清は1644年に明を倒し、北京に入り中国全土を統一した。中国大陸の統治をめぐる歴史絵巻。北京の秋の美しい風景は画伯と中国史の対話であったかも知れない。

11・12月「**大仏殿遠望**」に描かれている大仏殿は、天平文化の巨大な記念碑である。近くには聖武天皇遺愛の品々を納めた正倉院もある。その中にはペルシアをはじめとする西方の地から伝わったものも少なくない。奈良はシルクロードの東の終着地なのだ。その余韻に浸りつつ平山画伯と共に歩んできたシルクロード東漸の旅も今、ここに終わる。